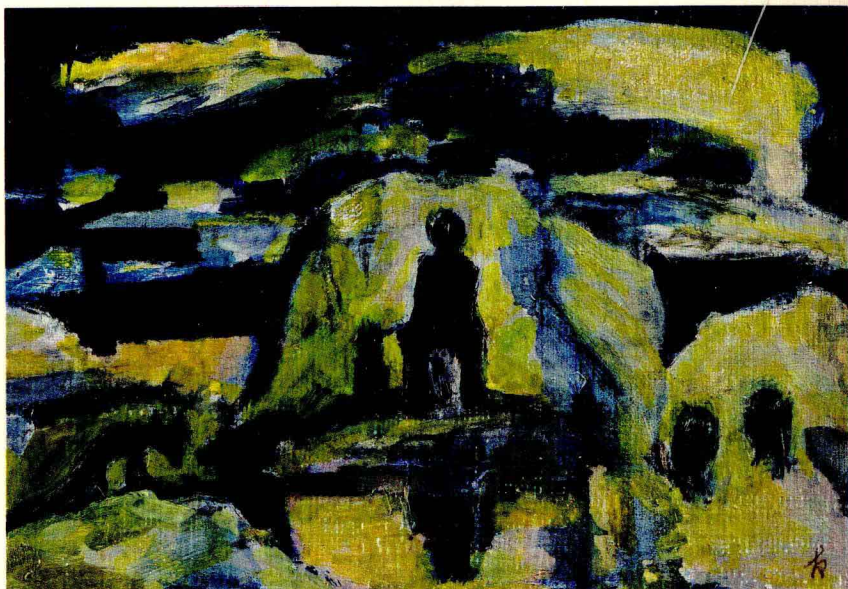


極北の旋律

～八木義徳の世界～

武田友寿



中西出版

旋律の旋律

～八木義徳の世界～



武	田	友	寿
---	---	---	---

極北の旋律—八木義徳の世界— 定価 2,000円

昭和63年6月10日第一刷発行

著 者／武田 友寿

発 行 者／八巻 正夫

編集・発行／中西出版株式会社

〒065 札幌市東区東雁来3条1丁目1-34

TEL 011(785)0737

振 替 小樽 1-10202

印刷／中西印刷株式会社

製本／石川製本株式会社

乱丁、落丁本は、ご面倒ですが小社宛ご送付下さい。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

極
北の旋律

——八木義徳の世界——

目次

序 章 「物おもう場所」碑…………… 7

第一章 永遠なる序章

幻の処女小説…………… 16

ネオ・ヒューマニズム…………… 22

第二章 文芸復興期の鼓動

リアリズムの発見…………… 28

小説の創造…………… 34

第三章 早稲田の森

師・横光利一…………… 42

才華の坩堝…………… 48

人間の生き方…………… 54

孤独の肖像…………… 60

第四章 暗い波濤

空白の季節…………… 68

大陸ふたたび…………… 75

異郷の報酬…………… 81

第五章 海ゆかば……

暗夜の灯……………90

作家の遺書……………97

戦場の芥川賞・1……………104

戦場の芥川賞・2……………110

第六章 レ・ミゼラブル

廃墟の慟哭……………118

パントマイムのセレモニー……………124

哀しきラブレター……………130

愛しき者よ……………136

第七章 歌声よ、おこれ！

戦後文学の気流……………144

歎きの歌……………150

呉越同舟……………157

新人の群れ……………164

第八章 試みの時代

デラシネ交響楽……………	172
娼婦たち……………	179
ソーニヤ幻想……………	185
「私小説」の危機……………	191
第九章 郷愁のこだま	
△戦後▽の終焉……………	198
原始の薫り……………	205
感動の記憶……………	211
回帰と出発……………	218
第十章 父性の原像	
骨肉の賦……………	226
新しい伴侶……………	232
父なるもの・1……………	239
父なるもの・2……………	246
第十一章 北国の作家たち	
漁夫画家・木田金次郎……………	254

文学王国へ北海道▽	261
北方の精神譜	268
道産子作家の友情	275
第十二章 遙かなる故郷	
港のある町	284
揺籃の情景	291
物思う日々に	297
屈辱の青春	304
第十三章 大地の歌	
聖なる自然	312
歳月の慈悲・1	319
歳月の慈悲・2	326
母の雅歌	332
よみがえる旋律	339
第十四章 終りなき北帰行	
曠野への旅	348

懐かしき人々……………	355
極北の落日……………	362
日はまた昇る……………	368
第十五章 作家のこよみ……………	
文学五十年……………	376
孤高の詩魂……………	383
終章 私の「八木義徳論」——「あとがき」にかえて……………	391

序

章

「物思う場所」碑

昭和六十一年の夏私ははじめて「八木義徳文学碑」の前に立った。数年来、胸中にあった念願であったからようやく碑前に立つことができて、感無量であった。

だいたい文学碑などというものは行きずりに見ても何の感慨も湧かないもので、どこかに旅行して目にしても無感興で見過す場合が多いものだ。一個の碑が何かを語りかけてきて、ある印象と想念を刻むには、そこに建てられた石碑や彫られた碑文が見る人の何かと感応するものがなくてはならない。私は八木氏の文学碑の前に立って、あらためてそんな考えにふけたのである。

文学碑には自伝小説『海明け』の中からつぎの一節が採られて彫ってある。

「この二百メートルほどの高さをもった小さな山の頂上は、中学時代の史郎にとっては『もの思う場所』だった。」

これは前から私は知っていた。故郷の友人が除幕式の写真と共に、私に送ってくれたものであったからだ。そのとき私は碑文が『海明け』から採った一節であることに素直に頷くものがあった。八木氏の故郷室蘭について書いた文章は他にもいくつもあるが、この自伝小説からの文章を選ぶことがやはり一番ふさわしい、と思えたからであった。

ところで『海明け』は昭和五十二年に北海道新聞に連載された小説である。連載稿の初回のゲラ刷りが上ったとき、それを持って道新東京支社の大須田一彦氏と私が池袋の八木氏の仕事部屋を訪ねて『海明け』連載スタートのお祝いをした。それから一年間、私は掲載紙を毎回大

須田氏から送って貰って読んでいた。淡々と運ばれてゆく筆であったが、私にはどの回からも「極北の旋律」が聴こえてきて快よく、いくどもいくども感動を誘われ、頬を濡らさずにいられた。

長く書きつづけた作家の生涯を作品というマイル・ストーンを辿って追跡してゆくと、晩年に豊かな創造世界を開いてみせている人にはかならず、「青春回帰」と名づけていい眩しい季節が見えるものである。私には『海明け』が八木氏にとってそういう作品なのではないだろうか、と思えてならなかった。それはこの小説の前後の八木氏の文学世界を一瞥すれば明らかなことである。もちろん、小説の基調にもそういうベクトルがあって、「極北」に象徴された「青春回帰」が哀しく、美しくうたわれている、と私には聴こえてならなかった。

私は『摩周湖』（昭和46年 土筆社刊）以来の八木文学の愛読者にすぎないが、旧作、新作を手に入る限り読んでいて、いつも感じるのは八木氏の「極北」精神であり、詩情であり、それへの回帰を示す軌跡であった。私はそこにこの作家の一種独特の倫理学と美学、さらにいえば信仰と呼びたい作家魂を見る思いがする。いや、氏の作家姿勢を支えているストイシズムというべきなのかもしれない。それは北国の自然が培ったものといえるが、私はむしろ、この作家の人生体験 Ⅱ 宿命が育て、築いた精神、思想、信条であろう、と思っている。

作品の背後に作家の Ⅱ 宿命の主調低音 Ⅱ を聴け——とは若き日の小林秀雄の文章にくりかえされている文学の極意に達する勧めだが、私が八木氏の文学にいつも聴いていた歌は、つまりは八木氏の Ⅱ 宿命の主調低音 Ⅱ という調べにほかならなかった、とずいぶんあとになって気づい

たことであつた。『海明け』はそういう意味で、私にはたいへん懐かしい小説と印象され、おりにふれて思いかえされるのである。

※

文学碑の前に立つて、前方に展がる室蘭の風景を厭かず眺めていたとき、私は八木氏にとつて故郷とは何なのか、とあらためて考えてみることを促された。

もちろん、その故郷とは、たんに生れ育つた場所、といった即物的なものではない。すくなくとも氏にとって、「故郷」が文学的世界として自覚にのぼつてきたとき、俄然その主題の音が変る、という異変が起こっている。いや、そればかりではない。創作意欲が刮目すべきほどに生気づき、深さと豊かさを増す、という結果をも招いているのだ。私はもういちど、氏の作品を丁寧に読みかえしてみたい、という気持ちをあらためてもらった。

これまで、おりにふれて読んできた氏の作品を通して、私は私なりに八木文学像といったものをもっており、それをいくつかの文章に書いている。だが私は、それで私の八木文学理解が出来上っている、とはつゆ考えていない。以前私は正宗白鳥について書くために膨大な作品を再読、復読していて、一作を読むごとに自分のそれまでの白鳥観が変るのを経験したし、この夏に七年がかりでやっと書き上げた「小林秀雄論」(『この人を見よ―私の小林秀雄』)の場合も、四十年間も彼の作品を味読していて鮮明な小林秀雄像を築きあげていたはずなのに、再読中に徐々に変わつてゆくのを見ていて興奮していたものだった。そんな身近かな経験の中で私は、いつか八木氏の作品を読みかえす気持と時間をもつことができたとき、私の中の既成の八木文

学像がどのような変り方をしてゆくのだろうか、と楽しく空想したりしていたのである。

私は批評というのは「精読の美学」なのだと思っている。もっとわかりやすくいえば、「精読」の果てにしか「批評」は生れないのだ、と信じている。近年の私はそう信じて批評の仕事をすすめている。八木氏の文学世界を語るにあたって私は、このような姿勢を貫くことになるだろう、と思っている。その結果が私のこれまでの八木義徳像、八木文学像を変えることになるのかならないのか、それはこの仕事を最後まですすめてみなければわからない。

「八木義徳文学碑」前に立って私が考えさせられたもうひとつのことがある。それは、この場所を氏が、少年史郎の「もの思う場所」としていることの意味であった。

私は敗戦直後の測量山に何度か登って視界に展がる四囲の風景に見とれたことがある。山頂はいま放送局の建物のあるあたりなのだろうか、そこは尖った狭い、山のテッペンであり、東西南北どの方向も無限に見渡せる場所だったが、私はよく八幡宮の裏手から急な坂をのぼり、雑木が背丈よりも高く伸びた細い道をつたって山頂にいたりついた。清水町から登る山道もあったが、庁立高女を過ぎると、人家も途絶えて木立に覆われて昼なお暗く、あまりに淋しいので私は八幡宮の裏道を選んでいたのである。戦後にしてこのとおりである。史郎「八木少年が「もの思い」にふけたのはそれよりもさらに二十年前の大正末期から昭和初年の頃である。私は文学碑の碑文を口ずさみながら、この山頂で「もの思い」にふけることをつねとした少年八木義徳の孤独と憂悶を想像して戦慄をおぼえた。いったい少年は何をここで考えていたのだ

ろうか？ 彼をここへ導くものは何であつたのだろうか？ 私は何気ない回想の一文と読めるこの一事に、八木氏の思春期のいわく言いがたい憂悶の深さ、おそらくそれに根をもつものにちがいない孤独と寂寥を読みとらずにいられないのである。

すくなくとも私が、測量山の中腹に建った文学碑の前に立つまでは、そのような八木氏の少年像を想像によみがえらせたことはなかった。むしろ『海明け』の一節から採つたこの断章が文学碑に彫られている、と数年前に聞いたときは、ロマンティックな少年の夢想姿を想像したりしたものであつた。尋常な少年なら、腕白坊主どもがよくやるように、いたずら遊びの絶好の場所として選ぶのが関の山で、「もの思う場所」として選び、憂悶を鎮める救魂の秘所として定めるとは思ひ及ばぬことである。

八木氏の文学が何を根所にし、何を志向して開花、展開されているのか——とここでいうのは性急すぎよう。私はただ、「もの思う場所」として語る測量山山頂がどうやらこの作家の文学の原質を育てており、「もの思う」内実が氏の文学の酵母をなしているのは間違いないだろう、という予想は述べておいていいだろう。そしてこの原質、酵母が、八木氏後半生の△極北▽の志向とどのようにつながるのか、『海明け』にみられる「青春回帰」とどう交わってくるのか、が私に八木文学再体験の旅へと誘つてやまない、といえばいいだろうか。

※

それともうひとつ。私に氏の文学を読みつづけさせ、批評衝動をおこさせるものとは何なのだろう？

もちろん私の同郷人の血などといった代物でないことはたしかなことだ。この作家にたいしてもつ私独特の親愛感のあることは否まないが、それが「オラがくに」的発想でないことは断っておかねばなるまい。では何なのか？　むしろこの問題こそ、この小論でせひとも確認してみたいと考えている私自身の問題にはかなならぬ。批評とはどうやら、そういう切迫した事情からしか生れてこない、と私は考えているようである。

この夏の日の「八木義徳文学碑」との対面は、私にそんな思いをいだかせたことになる。このことがなければ、私の「八木義徳論」も、まだまだ構想のまま長い冬眠をむさぼりつづけていただろう。

